

神原政常作品集 第三卷

アディン書房

編集委員＝阿坂卯一郎／豊博秋／福田薫／内木文英

榊原政常作品集 第三卷

昭和五十一年四月五日 初版印刷
昭和五十一年四月十日 初版発行

著者 榊原政常

装幀者 渡辺千尋

発行者 山口正毅

発行所 アデイン書房

東京都文京区白山一丁目六(中島ビル)
振替口座(東京)二二二九八九一
電話(八一三)七六七五

印刷 東京美術

製本 イマキ製本

MASATHUNE-SAKAKIBARA

©1976

0074-0012-0137

榊原政常作品集

第三卷

●目次●

袋の女

五

虫めづる姫君

四十九

異本竹取物語

八十三

死神やらい

一二七

親子雷

一四七

巢立つ雛たち

一七三

乗せてくれた車

二二五

予告された心中

二三三



創作劇の出来るまで

二七六

解説——阿坂卯一郎

三〇八

袋
の
女

登場人物

旅店の主人

旅店のおかみ

老人 リュウ

青年 レン

老婆 シン

少女 コオ

むかしむかし――

あるところ――

もともと荒唐無稽なお話。妙にリアルな、というより、トリヴィアルな手続きを超越し得る環境が許されそうな時と所ならどこでも結構。ここでは一応三百年くらい前の中国という事にして置く。

舞台は片田舎の旅店――

これもそれらしい事が分れば沢山。舞台正面は客室で中央からT字型に仕切られ二室に分れている。二室の間の壁には扉があり、各室とも正面奥へ出入する扉。その奥は廊下で入口や台所に通ずる。上手の部屋（Aと略称する）にも下手の部屋（B）にも粗末な寝台。あとは簡単な椅子、テーブル等、人間が一夜を明かすために最低限度必要な家具。下手の窓越しに庭が見える。

庭には桃の花が咲いている。

春の夕暮から翌朝にかけて――。

1

B室。青年レンとおかみ。寝台のそばに大きな袋がおいてある。

レン
おかみさん、まあ、聞いとくれや……。

おかみ はいはい。おやま、そうかいなあ。

レン ? ……まだ何にも言うてやへん。

おかみ まあまあ、ここへ着いたらもう安心。誰も追って来るものはあらへんで。

レン (あたりを見廻し) わあ……ひどい部屋やなあ。わあ、この寝台。こない宿屋、泊まる人あるのんか。

おかみ あるのんかて、何しろ、この頃の物騒なこと。何とかいうえらい大将が謀叛を起したとか起さんとかいうて、毎日々々戦争騒ぎ。三日ほど前に此の村にも襲って来て、わあっと通りすぎて北の方へ行ってしまった。ええ塩梅にうちは何にもとられなんだが……。

レン とるものあらへん。——北の方へわあっと行って、そこで攻め込んだのがピンリャンの城や。いやもう城内はひっくり返る騒ぎ。

おかみ そうやろ。その位やさかい、泊る人など、めったにあらへん。

レン あ、そこへ話が行くのか。ややこし。

おかみ 宿屋はしていても、こりや道楽みたいなもん。裏の畑から、食う物はたんととれますさかい、うちの人はそれを車に積んで売りに行きます程や。宿賃も安うしときます。ゆっくりして何ぞ面白い話など聞かせとくなはれ。

レン はいはい大きに、といいたいが、そうゆっくりはしとられん。

おかみ (寝台の傍においてある大きな袋を見て、げげんそうに近寄る) 旦那はん、お荷物は、これだけかいな。

レン おっと。あんまり近寄らんといてや。大切な品物やで。

その時袋がゴソゴソ動く。

おかみ (飛びのいて) た、た、た……。

レン な、なんや、仰山な。

おかみ 動いた。動いた。

レン ああ、これか。動く筈や。生き物や。

おかみ ああ、びっくりした。生き物いうと……？

レン 話せば長いことながら……おかみさん、まあ、聞いとくれや。この中に入っている生き物、何やと思う？

おかみ そやなあ……豚……。

レン ちがうちがう。

おかみ 羊……。

レン ちがうちがう。

おかみ 牛ではなし……。

レン ちがうちがう。

おかみ 何だんね。

レン ちがうちがう。

おかみ ええ……？

レン 人間や。

おかみ 人間……？

レン しかも女や。

おかみ 女……？ 若いのか。

レン そら、まだ分らん。

おかみ 美しいか。

レン それも分らん、まだ開けて見んさかい。

おかみ 開けて見ん……？ ほなら女やいうことだけ知ったる……？

レン そうやそうや。

おかみ 何でまた袋の中へ女を詰めて運ばんなりませんの？

レン そこや、話は。おかみさん、まあ、聞いとくれや。

おかみ はいはい。

レン よろしか。此の辺を通り過ぎた軍勢は謀叛を起した大将の部下。そらあんたの言う通りや。

奴等ピンリャン城に攻め込んで手当り次第の乱暴狼藉。やれ、掠奪はする、火はつける、女と見ればさらって行く。

おかみ こわやこわや。

レン おれは城内に住んで酒を売る店に雇われていたが、もうその店などはめっちゃめっちゃにされた。旦那は逃げる、家はつぶれる。仕様がな、国へ逃げて行こうと思うた。ところが……雇われてから三年越し、食う物も食わんで貯めた錢が、十両あった。これをこっそり中庭へ埋めておいた。そいつを堀り出して、城内を出よう……として、門の所へ来ると、貼紙がしてある。

おかみ おやおや、金をおいて行けと……？

レン ちがうちがう。「女売ります」と書いたのや。

おかみ 女売ります……？ ああジゴク宿か。

レン と思うたら、ちがった。この袋や。(袋、身を退くように動く。袋に) ようし、ようし、心配せんと、安心してや。今じき外へ出したるさかい……。 (おかみに) つまり、なんやね、兵隊どもがさらって来た女どもを袋に入れて売るのはやね。

おかみ あれま、いたましいこっちゃ。

レン こらおもしろい。国へ帰って百姓するにしても、いづれ嫁を貰わんならん。田舎の娘などごめんや。ようし、一番運試しや、こう思うてな。一袋買いましょ、と兵隊に言いおった。

おかみ 一袋なんぼやね。

レン 四兩。

おかみ 四兩？ えら半端やね。

レン 兵隊どもサヤをとってもうけよるのやろ。卸値はもつと安いのやろね。

おかみ けったいなこっちゃ。上は大将から下は兵隊小役人まで一様に、サヤをとるワイロをと

る、ほんまにけつたいな世の中や。

レン ここで腹立ってみても始まらん。都へ行って見。昨日大臣だった人が、今日は牢屋へブチ込まれとる。そのブチ込んだ人も翌る日は順にブチ込まれる。兵隊がサヤをとる位朝飯前や。

おかみ そこであんたは四両で買うたんか。

レン そこでおれは考えた。

おかみ ははん、なんぼ値切った？

レン へへ、値切るなどと、そんなしみったれたことせえへん。ええか。女は袋の中に詰めてあつて中味は見えん。中味を見んと買うてから、ジャンコ面の豚女などに当っては大変や。

おかみ そらほんまやね。

レン いっそのこと持っている十両全部兵隊にやつて、中味をあらためてから持って行こう、こう思うた。

おかみ そら、ええ思案や。そこで十両兵隊にやらはった……。

レン やろうとした……が、そこでおれは考えた。

おかみ ほほう、今度はどんな思案が浮びました……？

レン 十両といえど大金や。一年間一生懸命働いても二両か三両残せばええ方や。こら十両全部やることはいらん……。

おかみ それもそうや。

レン よし、十両のうち三両しまつておいて七両。これだけやればええやろ……。

おかみ そらええ思案や。そこで、七両兵隊にやらはった……。

レン やろうした……が、そこでおれは考えた。

おかみ よう考えるお人やなあ。

レン 嫁はん連れて国へ帰って百姓するにしたらが、一文なしでは仕様がな。ここに三両あるにしても、同じことなら、もう二三両……それでは四両払えば一杯やし……ええままよ、五両しまつといて、五両だけ使うたれ、こう考えた。

おかみ なあるほど。

レン つまり一袋四両のほか、一両兵隊につかませよう……。

おかみ ……としたが、そこであんたは考えた……。

レン もう考えへん。すばっと一両出した。

おかみ ほほう。人間、思い切りが肝腎や。

レン すると、兵隊め、ジロリと一両にらみつけて、ニヤリと笑った。

おかみ ニヤリとな、ふんふん。

レン そして小声でな。本来ならば端から順に売ってやるのじゃが、お前は特別、ずらりと並んだ袋のうち、どれでもええのを持って行け、しかし見廻りの隊長が来ぬうちにさっさと選べ……。

おかみ うまくやらはったな。

レン しめたと思うて、まずよさそうな袋の口をとこうとすると、「こらこら、一々袋の口を解いては暇がかかる。そこから触^ふつて選べ。手触りのよいのを持って行け」と、こう言うのや。

おかみ 手触りの、なあ。頼りないこっちゃ。

レン マ、それでもデブとヤセ位はわかる。なるべく足の小さい、腰のしまったのを選んで逃げるように持って来たのがこれや。

おかみ 年はいくつくらいやろね。

レン そうやなあ……年の頃は十七八……顔はもちろん花ものはじろうばかりの美しさ……。

おかみ 早う拝まして下されや。

レン いやいや、おかみさん、それは勘忍しとくれや。

おかみ あれ、なんでまた……。

レン せっかくの花嫁との初対面や。差向かいでシンミリ……となあ、そうやないか。

おかみ なるほど。そういううち暗くなった。灯あかりりを持って来て進すすめましょ。

レン そうか。大きに。

おかみ マ、何というても若いうちが花や。戦争騒ぎをよそに、美しい花嫁と二人で国へ帰って、おだやかに田を耕すのも結構な生涯。これから先パッと花の咲く事もある。楽しみなもんや。

おかみさんは愛想よく言いながら、奥の扉から台所へ灯をとりに行く。

あとに残ったレン青年――。

袋のそばへ寄る。心配そうに戸口へ身を寄せて耳を傾ける。また袋のそばへ行き、肩を叩いて慰めるように袋の上から軽くポンポンと叩く。